

# ICTを共通言語に 全員参加の授業改善を

教師全員が  
役割分担する研究体制を構築

ICTを活用することで、教師が共通の視点から授業改善に取り組むことができる——。東京都練馬区立中村西小学校（石井盛博校長）では、全教員が参加するICTの研究部会や、指導法の共有化などを通じて、学校全体が一体となったICT教育に取り組んでいる。

## ◆ICT教育1年生、とにかく使って蓄積を◆

「エルフを抱っこしている僕はどんな気持ちかな」東京都練馬区立中村西小学校（石井盛博校長）1年生の国語の授業。子どもたちが読んでいるのはハンス・ウィルヘルム作の『ずーとずーとだいきだよ』だ。主人公の「僕」が年老いた愛犬エルフを自分の部屋に抱きかかえて行くシーンで、担任の馬場美桃教諭は「僕がエルフを大好きだとわかる文章や絵に線をひいて」と子どもたちに呼びかけながら、実物投影機で教科書の図版を大きく映し出した。

エルフを抱きかかえる「僕」の画像を食い入るように見ながら、子どもたちは教科書の思い思いの箇所に線をひき、読みを深めていった——。

中村西小は平成22年度から2年間、パナソニック教育財団の特別研究指定を受け、ICTの実践研究に取り組んでいる。昨年まで電子黒板が1台だけだ

ったが、助成を受けたことで、実物投影機が全教室に導入された。

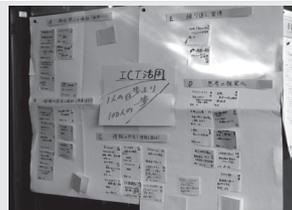
「みんなICT教育の1年生、とにかく使ってみて、使い方や授業での活用方法を蓄積していく段階です」という同校研究主任の曾我泉主幹教諭の



新しいICT機器の使い方を情報部が説明



言葉通り、中村西小では、今年、教師全員がICTの授業研究を実施。研究を進めるなかで編み出されたICTの活用方法を、付箋紙に書き出し、「①興味・関心の喚起（動機付け）」「②説明の補助（見通しをもつ）」「③情報の共有（理解を深める）」「④思考の視覚化」「⑤繰り返し、習得」の五つの用法に分類・蓄積し、共有を図るなど全員参加で研究に取り組んでいる。「1人の100歩より100人の1歩」が同校の合言葉だ。



ICTの活用法を付箋で整理し、五つに分類

## ◆全員参加の研究体制で一体感を醸成◆

このほかにも、中村西小では、ICTの実践研究を進める上で、授業班、冊子班、発表班、情報部の四つの部会を設置。全教師が必ずどれかの部会に参加している。授業班は、前述のICT活用法の分類や新しい手法の模索。情報部はICT機器の機能を研究し使い方を他の教員に紹介する。また、冊子班は、研究の成果をまとめて文章化するほか、公開授業の告知などの広報活動を担当。それをもとに発表班が、報告会などで研究の成果を対外的に発表する。

同校の石井校長はこうした取組みについて「ICTという一つの視点を全員で共有することで、教師が一体感をもって授業改善に取り組むことができる」と指摘する。ICTは授業研究において教科と学年を超えた教師の共通言語の役割を果たしているといえそうだ。（編集部）